飛脚便の送達内容は、將軍や藩主の逝去、キリシタン禁制、幕府巡見使の巡国など、重要なものの多くは書状として早飛脚で逋送されている。

飛脚は、書状だけでなく、酒樽・生鯛・塩鯛・干鯛・生蛸・煎海鼠・ささい（栄螺）・粕漬の鮑・練・蜜柑・山もも・瓜・砂糖結物・葛・手拭・一分判・銀子一枚などの音信物や金子、そして荷物や為替なども逋送したのである。

小倉藩 鎖国下の享保三年（二七一八）四月十五日、唐の飛脚船八隻が、響灘ひびき灘に浮かぶ白島と藍島あいのしまの間に出没した。翌十六日、小倉藩は藍島から、萩藩は南風泊なまかぜから、福岡藩は若松から軍船を出して唐船を取り囲み、鉄砲を打ちかけ、唐人八人を殺害し、多くの負傷者を出して打ち払った。三代小倉藩主小笠原忠基おだわらは、直ちに、長門、筑前両藩の打ち方役人を小倉会所に集め、唐船打ち払いの次第を尋ね、それを書きつけて出すように命じた。そして、それらの書きつけによって江戸への注進状を作成し、その日の夜、飛脚で逋送した。このように、鎖国下における唐船打ち払いの注進状が、小倉藩主によって、江戸へ飛脚で伝送された。

宝暦二年（一七五二）三月、四代藩主忠総ただかみは、領内に三種類の高札こうさくを出した。そのうちの一つは、次のようなものであった。

定継

一、公義御飛脚並御伝、夜中風雨を嫌きらわず、且速に差し出すべく候。惣

て往還の人馬とこま滞とどりなくこれを出し、勿ならば旅人に対し毛頭非義申し懸かけ間敷まじき事。

一、駄賃の儀、壹里壹駄に付銀四分宛、半駄賃は三分の事。

一、人足賃は本駄賃の半分たるべき事。

右の通堅これを相守るべき者也。

宝暦二年三月 日

左京小笠原忠総

藩主忠総（左京）は、「定継」（人馬継ぎ立ての定め）として、次の三か条を発したのである。

- (1) 公儀飛脚（幕府の公的継飛脚）・公儀伝馬は、夜中、あるいは風雨に限らず、迅速に逋送すること。往還の人足や継ぎ馬は、停滯とどりなく出動させ、旅人に対して非礼のないようにすること。
- (2) 馬継ぎ立ての駄賃は、一里（約四し）につき、馬一疋銀四分、半駄賃は三分とすること。
- (3) 人足賃は、本駄賃の半分、つまり銀二分とすること。

二 烽火ほのゑ

高速通信と 現今の郵政通信三事業といえは、郵便・電信・しての烽火 電話であるが、郵便にあたるものが「飛脚」とすれば、高速通信を使命とする電信・電話にあたるものは、さしずめ「烽火」であろうか。

発煙・発火による軍事的緊急通信手段としての烽火の歴史は

古く、シルクロード（絹の道）の玉門関や庫車に設置された烽火台は、北の匈奴の侵入を西安に知らせるものであった。李氏朝鮮時代に朝鮮半島の沿岸部や国内に張りめぐらせた烽燧台は、北辺の侵攻と海上からの侵略を都城に伝達するものであった。中国の紹興には、越のころの烽火台「飛翼檣」があり、寧波には、倭寇の襲来を知られる烽火山「招宝山」が残っている。

日本においても弥生時代の高地性集落に烽火の遺構が残存し、古代には国家的な烽制が確立している。『日本書紀』に、天智天皇三年（六六四）、対馬島・壹岐島・筑紫国に防（防人）と烽を置いたとするのが初見である。これは、前年の白村江の敗北により、唐・新羅の攻撃に備えるものであった。

『養老令』軍防令によると、烽は四〇里（二二二）ごとに置かれ、一烽に烽子四人が分番勤務し、烽長二人が三烽以下を檢校した。風土記によると、出雲国に五か所、豊後国に五か所、肥前国に二〇か所の烽が設置されている。古代の烽は、辺境から都を守るものであった。

烽が実際に戦で使われた例としては、天平十二年（七四〇）の藤原広嗣の乱で、広嗣が国内の兵を徵発するために筑前国遠賀郡家で烽をあげたことが知られている。南北朝・戦国時代には、烽火が合戦の合図や敵の動静を伝える手段として使用されたことが記録にみえる。

異国船の来襲 寛永十五年（一六三八）、天草・島原の乱を
と烽火台設置 平定した老中松平信綱は、長崎へ出て、勝本町
 の長崎代官末次平蔵邸に止宿、平蔵との閑談の中で、海防の
 必要性を痛感した。信綱は、早速長崎周辺を視察し、野母半島
 の尖端に遠見番所を新設、野母村の百姓に異国船の発見と通報
 を命じた。

そして同年、信綱の命令で長崎鳴滝の斧山に烽火台と番所が
 設けられ、烽火を上げて異国船の来襲を江戸及び近隣諸藩に報
 知するシステムを整備した。斧山の山頂に烽火台が設置されて
 以来、この山は「放火山」と呼ばれるようになった。因みに、
 幕府天文方伊能忠敬がこの地を測量し、文政四年（一八二二）
 に完成させた「伊能図大図」（平戸市・松浦史料博物館所蔵）に
 は、「放火山」と明記されている。

その後、異国船が来襲し、外国との緊張が高まるたびに、幕
 府は烽火の整備を繰り返し続けた。

寛永十八年（一六四二）、幕府は、福岡藩に異国船来襲に対
 する長崎警備を命じ、翌年には佐賀藩にも警備を命じた。以
 後、両藩が隔年に長崎警備を勤めることになり、長崎の西泊
 と大村領内の戸町に警備のための番所が設置された。

長崎の放火山の烽火台で、最初に、公的に烽火が上げられた
 のは、正保四年（一六四七）にポルトガル船二隻が長崎に來襲
 したときである。そして、享保四、五年（一七一九、二〇）に

は、佐賀領や天草で烽火台が再整備された。

フェート 文化五年（一八〇八）八月十五日、イギリス軍
ン号事件 艦フェートン号が、オランダ船拿捕を目的に長
崎港に侵入した。しかし、このとき、オランダ船は入港してい
なかつたため、出島のオランダ商館書記二名を本船に拉致し
た。

この年の長崎警備は、佐賀藩の当番であつた。当番に当たつ
た藩は、一〇〇人以上の警備兵を長崎へ出動させる義務が
あつたが、このとき、佐賀藩兵は八八人しか出動していなかつ
た。長崎奉行は手兵を持たず、わずかな警備兵では、たかが軍
艦一隻とはいえ、強力な大砲三六門を備えたフリゲート艦に対
し、なす術もなかつた。

人質の解放と引き換えに、薪水・食糧を奪取して退去する
フェートン号を見届けた長崎奉行松平康英は、その責任を感じ
て自刃した。それは、益明けの八月十七日の出来事であつた。
そして、十一月九日には、長崎警備の怠慢を理由に、佐賀藩主
鍋島齊直は逼塞処分、家臣七人が自害した。

烽火御用

このフェートン号事件を契機に、烽火による緊
急連絡の重要性が再考され、烽火台が肥前・肥
後・筑前・筑後・豊前・豊後国に整備されていった。そして
「烽火御用」（長崎異変を烽火で肥前国など六か国へ報知するこ
と）と「長崎非常御手当」（各藩の緊急長崎警備動員）が復活し

た。

長崎異変（異国船の来襲）を知らせる烽火が、長崎鳴滝の放
火山で打ち上げられると、琴ノ尾岳（長崎県西彼杵郡多良見
町）・烽火山（同南高来郡口之津町）・多良岳（実際は北高来郡高
来町の烽火山）で中継され、次々と肥前・筑前・筑後・豊前国
の各藩に移取されていった。

このうち、多良岳ルート（かざはや）の烽火は、風配（佐賀県藤津郡太良
町）・筒名山（つつなさん）（同小城郡牛津町）、長崎街道に沿つた佐留志御番所・
堤雄神社付近）を経て佐賀城内に伝えられ、更に日隈山（同神
埼郡神埼町）・朝日山（鳥栖市）に移取され、福岡藩領の天山（筑
紫野市）・四王寺山（しおうじやま）（大野城市）・シヨウケ越（糟屋郡須恵町）・
龍王山（嘉穂郡筑穂町）・六ヶ岳（むろがたけ）（直方市・鞍手町・宮田町）・石
峰山（北九州市若松区）に伝達された。これら福岡藩の六烽は、
文化五年（一八〇八）十月に整備された。

福岡藩では、長崎の放火山からの烽火情報を四王寺山で受
け、御笠郡乙金山（おとしがなま）（大野城市）で中継して那珂郡薬院村の丸尾
烽火台に伝え、福岡城へ伝達されている。

ところで、石峰山から足立山（北九州市小倉北区・南区）へ
伝えられた烽火情報は、小倉城へ伝達された。そして、足立山
で上げられた烽火は、苅田を越えて観山（行橋市）へ移取さ
れ、角田（豊前市）・雄熊山（築上郡新吉富村）から長峰尾（大
分県中津市）へ伝えられ、中津城へ伝達された。更に、大蔵山

(宇佐市・院内町)へと移取された。

長崎非常 鎖国下、異国船(黒船)の来襲を知らせる烽火
御手当 が長崎鳴滝の放火山から各地の烽火受信・発煙の山に移取されると、その烽火を合図に、肥前・肥後・筑前・筑後・豊前・豊後国の各大名は、軍役(將軍が大名・旗本に対して石高を基準に課した軍事上の負担)として藩兵らを長崎へ警備のために緊急出動させなければならなかった。これを「長崎非常御手当」あるいは「長崎御手当」といった。

寛永十八年(一六四二)以来、長崎警備は、福岡と佐賀の兩藩が隔年に勤め、一〇〇〇人の警備兵が出動することになってきたが、文化五年(一八〇八)八月十五日のフェートン号事件を契機に、肥前国をはじめ六か国の大名が軍役として藩兵を長崎へ緊急出動させたのである。

筑後国立花柳川藩(約一萬石)では、士分一〇一四人、船頭・揖取・浦水主ども三二五人、合計一三三九人の出動体制が取られた。長崎放火山の烽火が多良岳(烽火山)で受信され、多良岳で上げられた烽火を御牧山(福岡県山門郡山川町)でキャッチすると、柳川藩は、即刻、四五六人の先手隊を七隻の船団に分乗させ、有明海を一日で諫早港に入港、陸路一日で長崎へ着陣させた。

二番手隊八八三人は、一三隻の船団でこれに続いた。そして、二百目筒二挺・百目筒一〇挺・鉄砲一三二挺・火縄七二〇

曲・幕二〇対・高挑灯五〇・大竹五〇〇本・苦二〇〇枚・
筵一〇〇〇枚・蠟燭二〇〇〇挺・細引一五〇筋・柿洪紙一〇
〇枚・米二三三石一斗二升五合・銀貨四貫五三七匁五分・錢貨
六貫文などの武器・弾薬・食糧・軍資金・備品を携行した
〔舊柳川藩誌〕第八編「軍役帳 全」所収の「長崎軍役帳」、柳
川古文書館所蔵。

柳川藩だけでこれほどの陣立てであるので、長崎への非常御手当は相当なものであった。

小倉藩の長崎 弘化二年(一八四五)二月に、小倉領上毛郡
非常御手当 三毛門手永大庄屋三毛門一九郎が記録したものに、「長崎異変の節御手當一件」(豊津町立歴史民俗資料館所蔵)という史料がある。これは、長崎へ異国船が来襲したことを、長崎からの烽火によって小倉藩に伝達されたとき、藩はこれにどう対応するか、という対応策を書き示したものである。長崎警備のために必要な緊急動員の人数の数、各郡ごとの割当て動員数、集合場所、派遣の準備と心得などが詳細に示されている。

弘化二年(一八四五)という時期は、内憂外患、列強の外圧で、国内が動揺している時であり、殊に、一八四〇〜四二年のアヘン戦争で、中国がイギリスに敗北し、上海など五港を開き、香港(ホンコン)を割譲した直後の国際情勢であったため、長崎異変に対する緊迫感が史料の内容にも如実に現れている。

小笠原小倉藩並びに小倉新田藩(千束藩)では、藩兵以外に、領民にも長崎への緊急動員令が出された。

覚

一、人足五百人

一、馬式百八拾疋

内

一、人足九拾五人

企救郡

一、馬六拾壹疋

但、乗馬相成候に付、裸背馬にて差し出し申すべく候。

尤揃所は二ツ門脇御堀端に候事。

一、人足百貳拾九人

田川郡

一、馬七拾疋

メ

一、人足七拾三人

京都郡

一、馬三拾九疋

メ

右三郡は篠崎馬場、その郡の建札の場所え相揃い申すべき事。

一、人足八拾五人

仲津郡

一、馬四拾六疋

一、人足五拾四人

築城郡

一、馬三拾疋

一、人足四拾人

上毛郡

一、馬式拾壹疋

一、人足式拾四人

御屋鋪

一、馬拾三疋

御領分

メ

右は豊後橋・勢溜、その郡の建札の所え相揃い申すべき事。右人馬先づ

右場所え相揃い居り、差図次第大手前に繰り込み、相札を以て御武具方・

御鉄砲方・御賄方並びに御人数え引き渡し候に付、その心得罷り在る

べき事。

長崎警備緊急動員の人馬数と集合場所を表5-34としてまとめ

めておこう。

企救・田川・京都・仲津・築城・上毛の六郡と御屋鋪御領分

(小倉新田藩)を合わせて、人足五〇〇人、馬二八〇疋が動員

され、小倉城下の篠崎馬場や豊後橋勢溜の、それぞれの郡名を

掲げた建札場に集合させられた。

全員が集合したら、大手前に繰り込み、武具方・鉄砲方・

賄方・人数へ引き渡されたのである。

次に、長崎派遣の準備と心得について、引き続き史料を紹介

しておこう。

一、馬の口付は老人に限り候事。

但、銘々草伐鎌・かまぎ・馬繫杖持参候事。

一、人足食事、馬飼料当日限用意致し、罷り出るべく候。

翌日より御賄下され候事。

表5—34 長崎警備緊急動員の人馬数と集合場所

郡名	人足(人)	馬(疋)	集合場所
企 救	95	61	二ツ門脇堀端 篠崎馬場 その郡の建札場
田 川	129	70	
京 都	73	39	
仲 津	85	46	豊後橋勢溜 その郡の建札場
築 城	54	30	
上 毛	40	21	
御屋鋪御領分	24	13	
藩 全 体	500	280	

申さざる事。

但、銘々着替等成る丈省略いたし罷り出申すべき事。

一、長崎え異変の義これある旨承り候はゞ、人馬用意罷りあるべき事。

一、人馬小倉え呼び出しの時は宿継ぎ早走りを以て申し遣すべく候付、

即刻手当昼夜に限らず差し出すべく候。尤一郡丈けの人馬揃い申さ

ず共、一と手永限り相揃い候はゞ、大庄屋・子供役の内、一人差し

添え、一村には庄屋・方頭の内差し添え、罷り出申すべき事。

但、郡職耆本、手永職耆本宛相立て、罷り出申すべし。夜中は手

永桃燈、村桃燈燈し候事。

一、人足は二十歳より五十歳ま

での者罷り出申すべく候。

一、沓・草鞋は当日限り用意致

すべく候。御人数操出に相

成候得ば小的御門外にて御

役所並びに御人数より相渡

候事。

一、雨具・弁当類持人は右人数

の内より手明きこれあり候

積りに付、その者共持参、

又は昇荷等の者小附にいた

し申すべく候。これに依り

別段人足差し出し候に及び

一、右人馬は都て長崎迄通しに候事。

一、六郡の内にて子供役三人、小庄屋六人途中山駕宰領人馬世話方とし

て長崎え罷り越し、六郡操り合せ、人当相定め、名前書き付け、差

し出し候様差し計い候事。

但、支度は股引捻からげに候事。尤御紋付・法被・金笠小倉出立

の節、郡方組小頭松の丸にて受け取り候上、相渡し候筈に候。尤

右小頭組共四人程、是又人馬惣世話として長崎え指越候に付、申

し合せ、差支えなき様取り計り申すべく候。

一、郷筒共左の通手當人馬寄これある段承り候はゞ、即刻小倉に罷り出

候様取り計り候事。

一、郷筒拾人

内

一、式人

企救郡

一、三人

田川郡

一、壹人

京都郡

一、式人

仲津郡

一、壹人

築城郡

一、壹人

上毛郡

右の通り郡中役々は勿論、惣人別共に相心得べき事

巳正月